

第四回

みなかみ町俳句短歌大会

作品集

俳句の部

26 人 101 句

※順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

【最優秀賞】 11点

地の火照り鎮めて夕立去りにけり

長浜 利子

【入選】 5点

延々と見ごと越後の青田かな

阿部 伊亨

【優秀賞】 7点

深呼吸術後の肺を満たす秋

佐藤 美智子

【入選】 5点

高原を埋める彩り蕎麦の花

林 明男

【優秀賞】 6点

汗拭きつ撮り鉄が行く畦の道

番場 正夫

【入選】 5点

祭り髪結ふ束確と娘の小粋

遠藤 長代

【入選】 6点

報道も重き特集終戦日

北 雲

【入選】 4点

ものの芽のすべてを許す大地かな

長島 アキ子

【入選】 6点

空の青湖に沈めて秋立ちぬ

平井 登志絵

【入選】 4点

AIと秀句を競う秋灯下

美 泉

【入選】 4点

雲一つ浮かべし岳の晩夏かな

杉木 輝夫

【入選】 4点

山百合の花数かぞへ山の宿

関 和子

【入選】 4点

三世代揃いて囲む冷索麵

澁谷 典子

【入選】 4点

雨上り源氏蛸の珠たまの舞

諸田 弘

【入選】 4点

ふる里の記憶の杜や蟬時雨

高橋 寛

【入選】 4点

空青し黄金こがねの棚田赤トンボ

真庭 唯芳

【入選】 3点

裏山の賑々しきやほととぎす

酒井 富子

【入選】 3点

さらさらと青田吹き行く風の道

林 好一

【入選】 3点

弓を引く的を射抜けと郭公かつこう啼く

原澤 芳雄

【入選】 3点

園児等らが背伸びして挽もぐぶどう狩り

翠 華

【以下、投稿順に掲載】

熊除の鈴付け走るランドセル

長島 アキ子

泡沫うたかたや息遣いみる植田かな

北 雲

ものの芽のすべてを許す大地かな

長島 アキ子

のどかなる宴うたげはし烈蛸かこの群

北 雲

鮎あせの目を見ないふりして鮎あせを食ふ

長島 アキ子

もろこしの食べ頃を知る貉むじなかな

長浜 利子

風光る母の眼が追ふ児のあそび

長島 アキ子

地の火照り鎮しずめて夕立去りにけり

長浜 利子

晴れてよし細波さざなみ静か夏の海

原澤 健吉

歩行者の数多携帯扇風器

長浜 利子

七夕や願ねがい短冊風たなばたかぜに舞う

原澤 健吉

菜園の悲鳴なげ上げてる大旱ひでり

長浜 利子

陽ひをうけて大輪牡丹艶放あはれつ

原澤 健吉

温度計ぬり睨にらみて溜息ためいき炎暑なつ昼

津 恵 女

日雷ひかみなり妻つまより鳴りて今日もまた

原澤 健吉

風死んで鳥も飛ばない昼下り

津 恵 女

AIエーアイと秀句を競う秋灯下

美 泉

隠れてもデデ虫見つけ銀の足跡あと

津 恵 女

片陰かげを拾ひろい其そに凭よる予後の試歩

美 泉

孫の頬ほっぺ『イヤ』でふくらむ鳳仙花

津 恵 女

向日葵の迷路に子らの見え隠れ

美 泉

穂ほ孕なんだ稲との会話くわ楽らし朝

阿部 伊亨

おめかしの子らのままごとままごととなつざしき

美 泉

朝の月百日紅の花の上

阿部 伊亨

汗拭きつ撮り鉄てつが行く畦しづの道

番場 正夫

四年ぶり全開東北夏まつり

阿部 伊亨

取り入れの喜びよろこびに沸く秋あき楽らし

番場 正夫

延々と見ごと越後の青田かな

阿部 伊亨

皺しわくちやな手に感謝する豊ゆたかの秋

番場 正夫

墓洗むせふふと子の涙なみだかいま見し

角田 勝子

稲刈りや家族総出の祭りごと

番場 正夫

声出さず声かけ夫つまの墓洗むせふ

角田 勝子

報道も重き特集終戦日

北 雲

訃報つなもて繫つなが故郷田植時

角田 勝子

薰風かぜや空を広げてとびの舞う

北 雲

雷雨来る竹に怒りのあるごとし

角田 勝子

すいすいと生きて果てるや赤とんぼ

杉木 輝夫

散歩道朝あけの空月見草

原澤 廣子

冷し酒遠き日の父懐かしや

杉木 輝夫

溪谷の重り合ひて五月闇

関 和子

雲一つ浮かべし岳の晩夏かな

杉木 輝夫

山百合の花数かぞへ山の宿

関 和子

桃色は母性の色や鳳仙花

杉木 輝夫

山百合の它ふ川辺の宿に寝る

関 和子

まぶしさに早くおきろと蟬の声

岡田 完二

種子飛ばすかたばみ草の小さき音

関 和子

四年振おぎよん祭にぎやかだ

岡田 完二

雪溪や利根源流の若き日の旅

林 好一

青い空やつとなりたる夏野菜

岡田 完二

さらさらと青田吹き行く風の道

林 好一

秋分同窓会の準備会

岡田 完二

三十五度うつむきながら向日葵の笑む

林 好一

みんなの鳴き尽したる軀かな

平井 登志絵

吾が花壇夏草しげり三十五度

林 好一

空蟬の虚空を掴む気概かな

平井 登志絵

大輪の向日葵咲ける無人駅

原澤 芳雄

野萱草のかんぞうほうみやう法名の無き無縁塚

平井 登志絵

野天湯や瀬音聴きつつ見る蛭

原澤 芳雄

空の青湖うみに沈めて秋立ちぬ

平井 登志絵

信濃路やキスゲ花咲く霧ヶ峰

原澤 芳雄

せせらぎや出湯に夏を惜しみけり

酒井 富子

弓を引く的を射抜けと郭公啼く

原澤 芳雄

秋朝やふと目をさます鳥の声

酒井 富子

高原を埋める彩り蕎麦の花

林 明男

裏山の賑々しきやほととぎす

酒井 富子

熱帯夜息継ぐ音色救急車

林 明男

俄雨去りて涼しき日暮かな

酒井 富子

万緑を湖面に湛ふダムダムの町

林 明男

夏休み子等の声聞き元氣出る

原澤 廣子

新盆や縁遠くなる帰えり道

林 明男

アイス食べ暑さ勝負で草むしり

原澤 廣子

後の世に持つて行きたし蛭籠はたるかご

翠 華

園児等が背伸びして挽ぐぶどう狩り

翠 華

畑は野に還り残りし葱坊主

佐藤 美智子

障子貼る婆の手捌き年の功

翠 華

乱れ咲くもの刈り倒しゆく晩夏

佐藤 美智子

埋火に護られ寝むる家族かな

翠 華

深呼吸術後の肺を満たす秋

佐藤 美智子

綿投げしごと育ちたり雲の峰

遠藤 長代

旭日の谷川岳の幽玄さ

真庭 唯芳

予報官体温越えと西日読む

遠藤 長代

月冴えてすすき夜天に花と見ゆ

真庭 唯芳

祭り髪結ふ束確と娘の小粋

遠藤 長代

幼き日父母弟妹のあの笑顔

真庭 唯芳

汽車を待つ娘のつば広き夏帽子

遠藤 長代

空青し黄金の棚田赤トンボ

真庭 唯芳

三世代揃いて囲む冷索麵

澁谷 典子

奥山路秋を知らせし風さわぐ

久野 とし子

一雨が止みて虫の音響きけり

澁谷 典子

云うまじと誓えどこぼす「イチヨウの実」

久野 とし子

夕立や万物精気授かるる

澁谷 典子

夫よりのまさるる愛か豊の秋

久野 とし子

赤とんぼサイドミラーで一休み

澁谷 典子

つましくも心豊かや庭の秋

久野 とし子

雨上り源氏螢の珠の舞

諸田 弘

一時の雷雨さわがし祭り中

諸田 弘

大木と成りて庭木が涼を呼ぶ

諸田 弘

猛暑中函館山の風清か

諸田 弘

ふる里の記憶の杜や蝉時雨

高橋 寛

折れ曲り健気に咲くや螢草

高橋 寛

川分れ川合ふ中州柳の芽

佐藤 美智子

短歌の部

46 人 170 首

※順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

【最優秀賞】 19点

けんかなどしたことないと父威張る「母の我慢」
に気付かず逝けり

石崎 正次

【優秀賞】 9点

菩提寺の鐘の届かぬ峽に住み夜汽車の軋みに明日
の雨知る

眞庭 義夫

【優秀賞】 8点

「会いたいね」遠く離れた友人に毎年記す決まり
の文句

大山 真紀枝

【入選】 8点

この暑さいつまでつづくと見上げたる空にひとす
じ秋の雲みゆ

高橋 吟子

【入選】 7点

メールにて「溶けさうだね」と友嘆くそんな言葉
の当てはまる午後

奥村 清美

【入選】 7点

雪かきで氷になった両の手をいつものように首で
温め

宮崎 りえ子

【入選】 7点

久々に越後の故郷を訪へば迎える母なく山ぼうし
ゆるる

木村 初枝

【入選】 7点

節々の衣脱ぎ捨て若竹は緑の柔葉揺らし伸びゆく

翠 華

【入選】 6点

息子負ひ孫を負ひし日遠くなり我が背に残るかす
かな重み

杉山 久美子

【入選】 6点

抵抗し根を踏ん張りぬ畑の草我にも生きる権利あ
るぞと

番場 正夫

【入選】 6点

補聴器に入れ歯に眼鏡杖を手に吾れも目指すや百
歳の夢

杉木 輝夫

【入選】 6点

朝取りのきうりに塩振り差し出せば帰省の子らは
歓声を上ぐ

荒木 洋子

【入選】 5点

SLが白煙はきて新緑を突き抜け吼える凱旋のご
と

石坂 作次

【入選】 5点

遠く居てラインつながる娘より遠く感じる同居の
息子

加藤 南風

【入選】 5点

木洩れ日の参道歩み見上げれば阿吽あうんの仁王山門に
立つ

原澤 芳雄

【入選】 4点

七輪の炭火で炙る味醂干し猫はたまらず右足を出
す

吉田 まゆみ

【入選】 4点

三匹の金魚が声を持ったなら小さな鉢もにぎやか
ならむ

角田 勝子

【入選】 4点

甲子園四十九校勢揃い古閑メロディ響くグラウンド

澁谷 典子

【入選】 3点

この暑さ何がなくとも胡瓜揉み冷やしてシヤリシ
ヤリ頼りの奥歯

田村 鶴江

【入選】 3点

三つ目の赤信号で五桁目のメーター七はカチリと
揃う

田中 春枝

手桶持ちし母を軽々おんぶして娘は夕立の中を駆けゆく 杉山 久美子 メールにて「溶けさうだね」と友嘆くそんな言葉の当てはまる午後 奥村 清美

誰が誰を負ひてをりしや浅間山溶岩に埋もるる二つの骨形 杉山 久美子 けんかなどしたことないと父感張る「母の我慢」に気付かず逝けり 石崎 正次

久々に会ひし孫の背五尺越ゆ我が背に負ひしはきのうのことぞ 杉山 久美子 お風呂へは手ぶらでどうぞと仲居さん「手ぶらって何」幼な孫きく 石崎 正次

息子負ひ孫を負ひし日遠くなり我が背に残るかすかな重み 杉山 久美子 農作業身を粉に働く友の膝いつしか減りて手術するとふ 田村 鶴江

菩提寺の鐘の届かぬ峽に住み夜汽車の軋みに明日の雨知る 眞庭 義夫 手術終へ今は傘寿の友なりきゲートボールの県大会に出る 田村 鶴江

同病を相あはれみて語るとき終は明日のことにはあらず 眞庭 義夫 友の持つゲートボールの優勝杯新聞切りぬき日記に貼りぬ 田村 鶴江

山の田にわづかばかりの稲育て暮らしし父母の貧しかりけり 眞庭 義夫 この暑さ 何がなくとも胡瓜揉み冷やしてシヤリシヤリ頼りの奥歯 田村 鶴江

来る冬の雪の丈よりなほ高く限界集落埋めて夏草 眞庭 義夫 田を這いて雑草抜きし地味作業腰はへこたれ悲鳴上げをり 番場 正夫

青年よ平和憲法持つ国の希望の未来を君たちの手で 朝倉 薫子 傘寿にて男料理をする介護妣が教えり家事役立ちぬ 番場 正夫

コロナ禍で会うことかなわず死んだ友持ち帰った苗白桔梗咲く 朝倉 薫子 抵抗し根を踏ん張りぬ畑の草我にも生きる権利あるぞと 番場 正夫

母の日の娘からの贈物トートバック麦茶を入れて今日も三千歩 朝倉 薫子 鳴く蝉の順番までが気になりし猛暑が続くこの自然界 番場 正夫

暑い夏OB会のハガキ懐かしく出席にするも八十路の不安 朝倉 薫子 雪解に利根激流は岩を打つ白波高く碎け逆巻く 石坂 作次

空仰ぎ離れて暮す細き孫灼熱の中遊びかなうか 朝倉 隆志 梅雨空を癒すがごとき紫陽花は我が庭飾る朝光の中 石坂 作次

散歩道雑草高く道狭め田畑少なく老いる里悲し 朝倉 隆志 堤は裂け家並迫る濁流を救助のボート テレビで映す 石坂 作次

知事選挙関心薄れ山は荒れ群馬いななけ風強く吹け 朝倉 隆志 S Lが白煙はきて新緑を突き抜け吼える凱旋のごと 石坂 作次

道の辺に山百合あまた咲き誇り涼風にゆれ芳香放つ 奥村 清美 お祭りに花火大会四年ぶりコロナの事がちよつと気掛かり 長浜 利子

白日葵は蕾なれども陽に向かひくるくると向きを変へゆく 奥村 清美 木苺を含みてのんびり景色見て日課の散歩ゆるりと終る 長浜 利子

時くれれば若葉のマークとれるのに取ることかなはぬもみちのマーク 奥村 清美 猛暑中蜻蛉は飛びて虫鳴いて秋の訪れそこまで来てる 長浜 利子

南国で生れたゴーヤ猛暑でも枯れる事なく元気に育つ	長浜 利子	田舎から離れて暮らす子供達寒波の日にも暖かくあれ	小林 はつ江
七輪の炭火で炙る味醂干し猫はたまらず右足を出す	吉田 まゆみ	早朝のバケツに張った初氷割れる音してもう冬が来た	小林 はつ江
ごみ出しにくだる坂道鈍色の空は真近く雨のほいす	吉田 まゆみ	父の死後遅れて咲いた君子蘭シクラメンなど水やり十鉢	小林 はつ江
いつもより速まる鼓動抑へつつ深呼吸す健診の朝に	吉田 まゆみ	マスクラを塗る手を止めてふとよぎる付けまつげ次付けてみるかな	田中 春枝
真夏日の乾きし田のなか腰かがめ夕立まえに急ぎ草引く	吉田 まゆみ	三つ目の赤信号で五桁目のメーター七はカチリと揃う	田中 春枝
鏡みて目尻をすこし上げてみた二人で食べた三串の団子	本多 義二	「アナ雪2」観た日の夢に現れた氷の馬にまたがり走る	田中 春枝
櫛かけ次の走者に渡したい福寿草見る春の足音	本多 義二	車にはガソリン自分にはネイル気合いを入れるそれぞれの今日	田中 春枝
戯れか氷の欠片くわえつつ助走の鴉 車から見ると	本多 義二	まだあると感じて進む向こうにはよく似た女性こつちを見る	大山 真紀枝
風呂あがり髭そりあとに乳液をつけて鏡もやや若返る	本多 義二	「会いたいね」遠く離れた友人に毎年記す決まりの文句	大山 真紀枝
実家にて見守り続け半世紀カーブミラーのサビ告げるもの	篠原 忠	ぐるぐるとハンドル回し降り積もる氷の上にメロシロップ	大山 真紀枝
マスクして懐かしの曲聞きながら君と離れてスノーボー滑る	篠原 忠	そういえばいつも右から履いている順番決めた訳ではないが	大山 真紀枝
空の氷が落下してきてボンネットにくぼみを作り気持ちもへこむ	篠原 忠	勉強を始めるまでが一苦労一步が出ない子供と私	宮崎 りえ子
腰いたで病院通いシツプ貼り痛みが緩むこの春の福	篠原 忠	目の前にいるのに何も聞こえない君の心は深海の底	宮崎 りえ子
荒れた田を堤の水で耕せばみるみる内に水鏡となる	本多 寿美枝	雪かきで氷になった両の手をいつものように首で温め	宮崎 りえ子
どうしても縮まりきれない距離感を二日目のおでんが和ませてゆく	本多 寿美枝	まず笑顔それが私の決まり事笑う門には福来るだし	宮崎 りえ子
黒蜜ミルクタピオカティーは来たけれどサイコロ氷に阻まれている	本多 寿美枝	心配を忘れるように円描くクエン酸吹きウロコを落とす	篠原 香代
辛いけど一気に登ると決めている三階までの三十二段	本多 寿美枝	顔知らぬアカウントだけで繋がれる怖さ知りつつDM送る	篠原 香代
笑い顔作った時と無理な時右手は左楽しくなあれ	小林 はつ江	〽〽のカタチの氷並べ替えレンガの間は誰との距離か	篠原 香代

シール剥ぎカレンダー横にとっておく今年も母のパンまつりくる

篠原 香代

あらためて距離から学ぶ大切さお山のさるも庭のミミズも

深代 里子

湖の水面に映る富士山をスマホの画面に写す叔父さん

大山 智也

つめたくてだけど気になる存在の心の氷さわりたくなる

深代 里子

ザワザワと波が立っても凜としていい距離保つ二匹のカモメ

大山 智也

ふる里の思い出たどる夢日誌庭石に添い老を楽しむ

深代 里子

水張るいつもの道の水溜まり避けて歩けるようになってた

大山 智也

「ディスタンス」くり返すうち溶けてゆくリアルな距離感淡雪のごと

小室 史

玄関を開けっぱなしの前科ありドア閉めカギ閉め指差し確認

大山 智也

目が覚めて ザラリと残る後味に他人は自分の鏡だと知る

小室 史

右足の内側伸ばすストレッチかがみの中に縮んだ顔が

倉田 富夫

凍りつく。カシミヤ100のセーターに飛び火のように散らばる穴よ

小室 史

ちか過ぎずはなれ過ぎててもコロナ禍の人との距離を心の中で

倉田 富夫

新聞紙小さく切つてストックし食後のお皿拭いとるのよ

小室 史

凍りつく窓越しに見るやまなみに谷川岳はひとときわ白く

倉田 富夫

窓いっぱい風入り来て野分けだつ酷暑の夏は吹っ飛んでいく

津 恵 女

人に会うただそれだけのその勇気人に言えないわたしの決まり

倉田 富夫

文句云う吾を無言で見てる妣短夜の夢酔めて悲しき

津 恵 女

笑えない顔と嫉妬を写すから足早に過ぎるショーウィンドー

加藤 南風

灼熱の蕩ける程の太陽と対峙植木職人は高き梯子に

津 恵 女

遠く居てラインつながる娘より遠く感じる同居の息子

加藤 南風

熱帯夜寝むれぬまゝに庭に出る早、所狭ましと秋の虫鳴く

津 恵 女

「さっきはどうも」マスクの顔は無反応もう一度見てどきりと氷る

加藤 南風

年々に歩幅小さくなって来てときに躓きときによるける

角田 勝子

朝一番うつかり受けたクレームをひと日熟して一番搾り

加藤 南風

仏壇に胡瓜の馬や茄子の牛ならべて見上げた鴨居写真

角田 勝子

歌みたい口紅で文字でもやっぱ折れたら勿体ないからやめた

金子 美由紀

貧しくも雨露しのぐ家がある亡夫に感謝の老い果るまで

角田 勝子

受話器越しつながっている言う君と温もり欲しくて距離に負けた我

金子 美由紀

三匹の金魚が声を持ったなら小さな鉢ものにぎやかならむ

角田 勝子

まだ暗い通勤の道日が差して樹氷が照らす今日のはじまり

金子 美由紀

終活の集大成に墓石を建てて夫婦の名を刻むなり

杉木 輝夫

締切にキュッと心臓つかまれて日々につぶやく「手帳見ること」

金子 美由紀

一杯の酒かビールか焼酎か有れば極楽あしたも元氣

杉木 輝夫

かがみみて自己のお姿ほればれといつも正しく教え学べる

深代 里子

補聴器に入れ歯に眼鏡杖を手に吾れも目指すや百歳の夢

杉木 輝夫

死ぬ日まで車の免許手放せぬバスも通わぬ僻地なりやこそ	杉木 輝夫	岩ぬぐいカラフルボート滑りゆく時に歓声飛沫とあがる	ベネット 昭子
久々に越後の故郷を訪へば迎える母なく山ぼうしゆるる	木村 初枝	猛暑なる日々の暮らしは八十路身に何も出来ずにただのんのと	林 好一
庭隅に赤く色づく「ほおづき」を口に含めば杳き日に会う	木村 初枝	利根源流三角雪溪見とどけし八十路の我の若き日の旅	林 好一
退職し平日昼を縁側に昔を語る夫に耳寄す	眞庭 ヨシ子	まだ暗き新聞受けを覗き見て今朝はどうした若き配達	林 好一
病持つそれぞれの人それぞれの面浮かび来る職退きてのち	眞庭 ヨシ子	蟻螂の鎌振りかざし蜘蛛を追う今朝の決闘カメラに収めて	林 好一
何度みても既読とならぬ写メールの谷川岳は夕陽に尖る	眞庭 ヨシ子	フアクシミリお世話になった憶えなし急に本名なのられてもね	凡 々々
山頂に揃ふ笑顔を映さるる友の葬送肩落とし並ぶ	眞庭 ヨシ子	保守的な男だなあと云われても知らんの？昔キャッチャーだつて	凡 々々
夏草の蔓の伸びたりフェンス越え灼熱の地をしたたかに這ふ	荒木 洋子	酒の量だれもが認める底抜けとどうして何故か底無しでなし	凡 々々
酷暑なる一日を今日も抗はず日の入り待ちて畑に水撒く	荒木 洋子	シュートでなしメッシの本領バスにあり え、そうなんかい メッシ奉公	凡 々々
朝取りのきうりに塩振り差し出せば帰省の子らは歓声を上ぐ	荒木 洋子	喜寿過ぎて峡の棚田の畦を刈る額のしわに汗流れくる	原澤 芳雄
音楽を鳴らし来たれる週一の移動販売一人の客に	荒木 洋子	木洩れ日の参道歩み見上げれば阿吽の仁王山門に立つ	原澤 芳雄
友誘い体年令検査受く汗ひたたるも結果ルンルン	原澤 廣子	旧街道辻にまつらる大草履魔除けの風習残る集落	原澤 芳雄
猛暑日だ日の出を待たず芋を掘る虫と汗には意を介さずに	原澤 廣子	いにしえの古城址訪ねるひとり旅苔むす石垣往時を語る	原澤 芳雄
産まれ来るまだ見ぬ赤子に夢広げ新米ママは今日もあれこれ	原澤 廣子	職退きて二十三年ともすると電車に遅るる夢を見るなり	石坂 喜美江
接客の外国人に迎へられエレベーターにて何処からと問ふ	関 和子	真夜に聞く貨物列車の軋む音残業したる若き日惚ぶ	石坂 喜美江
梅干の染らないのは紫蘇のせい勝手に思ひ梅裏返す	関 和子	窓開ければ淡き紅色合歡の花憂ふところに葉風のやさし	石坂 喜美江
この町に来てよかったと言わせない山、川ありて人はお節介	ベネット 昭子	夕風にゆるるる初花蛍袋亡き母偲び手折りて供ふ	石坂 喜美江
電子マネーカード使えず現金のみそれでもバアバ店続けている	ベネット 昭子	月夜野に、名胡桃、蟹原、政所古き良き名の香ほる山里	翠 華

節々の衣脱ぎ捨て若竹は緑の柔葉揺らし伸びゆく 翠 華

お月見の幼きおもい日に浮ぶ父の笑顔に母の面影 真庭 唯芳

鼻歌で厨をスキップする妻は若菜を刻む春の朝かな 翠 華

紺碧の空高く舞う犬鷲の急降下お見事の技 真庭 唯芳

降り積もる雪掘る日々は地獄でも芽吹き春は浄土なるかな 翠 華

利根川に霧が流れて波静かほんのりのぞく岳のいただき 真庭 唯芳

待ちに待つ曾孫の出産近づきてひそかに待てりその日来るまで 菜 花

我が町は野も山川も潤うて暮しも豊か水源の町 真庭 唯芳

小野池の川面に咲きしあじさいの花の色にも心癒さる 菜 花

萱葺のどつしり重き長屋門古きをつたえる彦部家住宅 真庭 三枝子

友人に声かけてみて返事すら出来ぬがままに病進めり 菜 花

庭掃除木賊にのぼる蟬のからそつと手に乗せじつとみつめる 真庭 三枝子

凌霄花暑さに負けず枝のばし次々と咲き夏を謳歌す 高橋 吟子

ミンミンと蟬の合唱耳にして主人と交す朝餉のひととき 真庭 三枝子

テレビにて長岡の花火みて思う戦下の子等にひとめみせたと 高橋 吟子

ステテコで朝より出かける小さな畑太陽を背にしてトマトをとるなり 真庭 三枝子

体温を越す暑さなど何のその稲は穂を出し花を咲かせり 高橋 吟子

この暑さいつまでつづくと見上げたる空にひとすじ秋の雲みゆ 高橋 吟子

甲子園四十九校勢揃い古関メロディ響くグラウンド 澁谷 典子

立秋や車椅子より手を伸ばし出穂愛でたる亡父の浮きくる 澁谷 典子

帰省子の気配り嬉しお料理は僕が作るとエプロン持参 澁谷 典子

天災の次々起こるこの星に安らぐときの訪れ願ふ 澁谷 典子

鮎釣りの友は越後の阿賀野川一腕違う太公望なり 諸田 弘

天仰ぐたくみの里の大恐竜首を下して夏草を食む 諸田 弘

短夜や夢の途中で朝になり明日の夜は昨日の続き 高橋 寛

ふる里の背戸の田圃や赤トンボ夢から覚めて天仰ぎ見る 高橋 寛

第四回みなかみ町俳句短歌大会作品集

令和五年九月十日 発行

編集／発行 みなかみ町教育委員会生涯学習課

〒三七九―一三〇五

群馬県利根郡みなかみ町後閑三二二番地一

みなかみ町中央公民館内

電話 〇二七八(二五)五〇二五